巻　頭　言

農耕の開始

公益財団法人日本植物調節剤研究協会　理事長
宮下　清貴

農耕の開始は人類の歴史における画期となったことから，「農業革命」とも呼ばれる。この言葉は，「それまでの狩猟・採集で生きてきた社会が，一転して，しかも急激に農業の社会に転じた」ことを意味する仮説である。しかし考古学等の知見が集まるにつれて，狩猟採集社会から農耕社会への移行は突然起こって急速に広まったのではなく，1000 年単位という長い時間をかけてゆっくりと進行したことが明らかになってきている。

約 20 万年前にアフリカに誕生した現生人類は，12 万 5000 年前頃には出アフリカし，その後西アジアからユーラシア大陸の各地へ移住，2 万年前にはユーラシア大陸のほとんどの地域に展開した。誕生以来人類は，野生の動物や木の実，果実など，天然の生物資源を食料として生活していた。狩猟採集生活については，自然に完全に依存した，食料確保も容易ではない原始的な生活というイメージが強く持たれてきたが，農耕生活に比べて労働に使う時間が短いなど，逆に余裕のある生活であったことが示され，見方が変わって来ている。

農耕の開始はおよそ 1 万年前のことで，世界の数箇所でそれぞれ独立に始まっている。農耕を開始するに至った大きな要因としては，人口増が考えられる。狩猟採集生活では，人々は食料となる動物の群れを追い，また植物資源を求めて移動し，大陸に広がっていったが，人口密度が増加するにつれて生態系の人口収容力の限界に近づき，移動により新たな食料源を求めることが困難になっていった。その結果，定住への圧力が高まったが，従来の狩猟採集生活のみでは定住して食料を得ることは困難であり，農耕という新たな食料獲得法に乗り出した。

当時の気候変動も農耕の開始に大きく影響した。約 2 万年前の最終氷期を境に約 7000 年前のヒプシサーマル期（最暖期）にかけて地球は急速に温暖化が進み，植物の生育にとって好適な環境となっていった。しかし温暖化は一直線に進んだわけではなく，その間何回か変動を繰り返した。約 1 万 1700 年前にはヤンガードリアスと呼ばれる寒の戻りが起こり，1300 年ほど続く。西アジアにおける農耕開始の時期がこの時期と一致することが花粉分析の結果から示され，この寒の戻りが農耕開始の引き金となったことが考えられている。再び襲った寒冷化により低下した人口支持力を上げるためには，より効率の良い食料獲得方法が必要となったであろう。

農耕の開始は，短期間のうちに起こって広まったイベントではなく，長い時間をかけて展開したプロセスであった。その間は，狩猟生活と農耕生活のどちらか一方に頼るのではなく，両者が様々な割合で併存した社会であった。狩猟採集生活では環境中の多様な生物資源を食料として利用していたのに対して，農耕は限定された植物種に食料獲得を託す営みである。異常気象などの環境変動を考えるとき，農耕に食料のすべてを頼るのはリスクが高かったと考えられる。

日本では縄文時代，温暖化が進行して落葉広葉樹林，照葉樹林が広がっていくなか，生態・環境の変化に適応して，木の実類を中心に魚介類などを組み合わせた食料体系がとられていた。時代が進んで本格的な灌漑稲作が行われるようになった弥生時代においても，堅果類など縄文時代からの伝統の植物資源や果実類が広く利用されていたことが明らかになってきている。稲作は，台風や低温などの気象災害により壊滅的な被害を受ける可能性がある。弥生時代における，縄文時代からの幅広い植物資源の利用は，そうしたリスク回避の意義が大きかったと考えられる。

農業にとって環境・生態系への適応が重要であることは，今も昔も変わりない。